様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２４５７

研究課題名（和文）明治期から昭和初期の学校教育における「修養」と「教養」に関する基盤的研究

研究課題名（英文）A fundamental study of "cultivation (Shu-yo & Kyo-yo)" in school education from the Meiji Era to the early Showa Era

研究代表者
齋藤　智哉（Saito, Tomoya）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：８０５７０４８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近代日本において自己形成の中心的概念であった「修養」と「教養」の思想と実践を、明治期から昭和初期の学校教育に限定して検討し、歴史的に解明することである。研究開始から間もなくコロナ禍にみまわれたため、当初の計画通りに研究を進めることができなかった。そのため、既存の史資料を用いた研究へ変更した。具体的には芦田恵之助の修養概念の検討に限定し、芦田における修養の構造を素描した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代日本における「修養／修養主義」と「教養／教養主義」の解釈や定義は定まっているとは言えない現状がある。そのため、本研究において、明治期から昭和初期の学校教育に限定して「修養／修養主義」と「教養／教養主義」を検討し、相互関係を俯瞰できる座標軸を作成して特質を解明することには、十分な学術的意義があると考えられる。また、歴史的文脈に即して、これからの日本社会においていかなる「教養」が必要になるかの展望を得られることに、本研究の社会的意義があると言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine and historically elucidate the ideas and practices of “Cultivation(Shu-yo & Kyo-yo)”, which were central concepts for self-formation in modern Japan, limited to school education from the Meiji Era to the early Showa Era. Due to COVID-19 that struck shortly after the start of this study, I was unable to proceed with the research as originally planned. Therefore, this study was changed to a study using existing historical materials. Specifically, the study was limited to an investigation of Enosuke Ashida's concept of Shu-yo, and sketching the structure of Shu-yo in Ashida.

研究分野：教育方法学　教育史

キーワード：修養　教養　修行　身体　静坐

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）「修養」研究の全体像を把握するためには、瀬川大の研究が大きな手がかりとなる（「『修養』研究の現在」『研究室紀要 第 31 号』東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、2005 年）。瀬川は同論文で、日本の伝統的な自己形成概念としての「修養」と天皇制イデオロギーを浸透させる装置として機能する「修養」の２つに分類したが、教育史における「修養」研究の動向は殆ど扱っていない。このことは、教育史や教育思想史が「修養」を十分に主題化してこなかったことを意味している。教育史における従来の「修養」研究の主たる対象は、修養団や青年団に代表される、青年期に焦点を当てた学校外教育における自己形成概念としての「修養」だったからである。田嶋一の研究（『〈少年〉と〈青年〉の近代日本 人間形成と教育の社会史』東京大学出版会、2016 年）や和崎光太郎の研究（『明治の〈青年〉 立志・修養・煩悶』ミネルヴァ書房、2017 年）も同様の文脈にある。

（２）「教養」研究に関しては、筒井清忠の研究（『日本型「教養」の運命』岩波書店、1995 年）や渡辺かよ子の研究（『近現代日本の教養論 一九三〇年代を中心に』行路社、1997 年）を代表に、竹内洋の一連の研究（『教養主義の没落』中公新書、2003 年など）もあり、一定の成果を収めている。また、土持ゲーリー法一の研究（『戦後日本の高等教育改革政策 「教養教育」の構築』玉川大学出版部、2006 年）や吉田文の研究（『大学と教養教育 戦後日本における模索』岩波書店、2013 年）など、高等教育を対象とした教養教育研究における深まりも見られる。このように、「修養」研究に比して、「教養」研究は広範囲にわたって膨大に蓄積されている。

（３）「修養」研究と「教養」研究にこれほどの違いが生じているのは、「修養」研究が、筒井や渡辺による「教養」研究のいわば副産物として進展し、深められたからであろう。さらには、筒井や渡辺に限らず、多くの「修養」研究は、唐木順三が『現代史への試み』（筑摩書房）において提出した、大正６・７年を画期として日本社会が「型」を喪失し「修養」から「教養」の時代へ変化したという基本枠組みを自明の前提としているが、その枠組みを再検討していないことも要因の一つとして考えられる。このような研究状況において、「修養」あるいは「教養」研究を進展させる可能性があったのは、王成の研究（「近代日本における＜修養＞概念の成立」『日本研究 29』2004 年）であった。王は、中村正直が cultivate に対する翻訳語として「修養」を採用したことを初めて明らかにしたが、中村による「修養」の意味の解明には至らなかった。そのため現在でも「修養」研究は停滞し続けている。以上が、研究開始当初における、本研究の学術的背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、近代日本において自己形成の中心的概念であった「修養」と「教養」の思想と実践を、明治期から昭和初期の学校教育に限定して検討し、歴史的に解明することである。

「修養」は日本における伝統的な学び方として語られることが多い。「修養」という言葉は儒学で用いられていた言葉であり、近世における「養生」との連続性も認められる。しかし、一般的に用いられるようになったのは、中村正直による翻訳が大きな画期であった。中村は Self Help を翻訳する際に、cultivate や cultivation に「修養」の訳語を採用した。そして、cultivate や cultivation を「修養」だけでなく、「教養」や「教育」と訳していることも注目に値する。

他方で「教養」は、従来の教育学において Buildung に代表される自己形成概念として論じられてきた。申請者が明治期から大正中期までの国語辞典を調査した結果、「修養」も「教養」も「教育」と同義であることが判明している。また、辞典の編纂に関しても中村の影響があるが、これらのことは先行研究で扱われていない。

しかし、「１．研究開始当初の背景」でも述べた「修養」と「教養」研究の現状があり、とりわけ教育史では青年期に焦点を当てた学校外教育が研究対象であったため、本研究では学校教育に検討対象を限定することにした。

３．研究の方法

（１）先行研究の収集

東京大学総合図書館、東京大学大学院教育学研究科・教育学部図書室、國學院大學図書館、明治大学中央図書館、及び国立国会図書館を中心に先行研究の収集を行う。また、CiNii、J-STAGE、Google Scholar 等のウェブサイトも利用する。

（２）史資料の収集

平成 26 年度までの科研費（若手研究（B）研究代表者・齋藤智哉「明治期から昭和初期の学校教育における子どもと教師の『修養』に関する歴史的研究」課題番号 24730667）において収集した史資料以外の新規史資料の収集を行う。奈良女子大学附属小学校資料室の資料整理が終わったため、前回調査の際に同資料室で確認できなかった学校史料の調査と撮影を行う。また、連

携研究者を務めた科研費（基盤研究(B)研究代表者・田嶋一「飯田下伊那における学校史料と地域社会に関する基盤的研究」課題番号 22330219）での史料収集の補足分を補うため、長野県飯田市立座光寺小学校、同追手町小学校所蔵の学校史料に関して、飯田市歴史研究所等に協力を依頼して収集を行う。飯田下伊那関係者へのインタヴュー調査も行う。具体的には『竜丘の自由教育の神髄を探る』（秀文社、2010 年）の著者である木下陸奥氏へのインタヴューを実施する。飯田生まれ飯田育ちで既に 90 歳を超す木下氏からは、すでに「修養」に対するキリスト教の影響等を断片的にお聞かせ頂いているが、本研究において本格的に聞き取りを行う。

以上を研究開始当初は予定していたが、コロナ禍によって現地を訪れることが難しくなったため、収集することができなかった。

（３）史資料の検討と分析

①中村正直における「修養」概念の研究を引き続き行う。中村の「修養」は本研究の骨格を明確にするために必要だからである。中村がサミュエル・スマイルズの Self-Help を翻訳する際に culture と cultivation に対する訳語として「修養」を採用したことが翻訳語としての「修養」の誕生であった。そこで、中村が翻訳の際に参考にしたロブシャイドの『英華辞典』と、明治期に日本国内で出版された国語辞典等に掲載されている「修養」の意味を重ね合わせながら、明治初期から中期にかけての「修養」の意味の変遷を構造化し重層的に明らかにする。

②「教養」研究に関して、飯田下伊那と関係が深かった木村素衛の思想の解明と、実践者として関わりのあった西尾実の思想と実践の整理を行う。その際には、西田幾多郎をはじめとした京都学派の思想を補助線とし、「修養」と「教養」の交差点であった飯田下伊那を対象として両者の特質を明らかにする。

③奈良女子大学附属小学校史料室が保管する『学校日誌』『職員会記録』『教授要綱』『教授細目案』『教育功程』『学習指導要領』『学習研究会記録』等の学校史料の閲覧とデジタルカメラによる撮影を悉皆的に行う。3 日間の調査を 2 回行う予定である（計 6 日間）。史料収集終了後は速やかに分析作業に入りたい。具体的には、同校史料室で収集した史料と木下竹次の著作（雑誌論文含む）における「修養」「訓練」「訓育」「肚腰練成」など本研究におけるキーワードが使用されている箇所を全て抽出し、文脈上でそれぞれの意味を確定していく。また、木下竹次が奈良女高師附小の主事を務めた時期は長いことから、キーワードの使われ方や意味に変化があった場合は、時期区分を設定することも予定している。

④芦田恵之助の「修養」に関して、『芦田惠之助国語教育全集』に加えて『同志同行』など図書館等で閲覧・入手できる全ての著作と雑誌論文における「修養」の使用箇所を悉皆的に抽出し、文脈上で「修養」の意味を確定する作業を行う。とりわけ、芦田の場合は、教師の「修養」に焦点を当てて分析を進める。

⑤総合的考察として、明治期から昭和初期の歴史、社会、文化、教育の文脈の中に丁寧に位置づけながら、「修養」「教養」の構造を描き出すことで、実態が不明確な「修養」「教養」を俯瞰するための座標軸を作成する。そして「修養」「教養」の様相と歴史的な意義から、自己形成の方法としての「修養」「教養」を、「主義」と差異化しながら意味付け直す。

４．研究成果

（１）明治時代における芦田恵之助の「修養」

本論文では、先行研究で等閑視されてきた明治時代における芦田の「修養」について、次の方法で検討を行った。検討対象を『芦田恵之助国語教育全集 1～4』（明治図書）を中心とし、対象時期における「修養」と「修練」の使用回数を調査して使用例を分析した。検討の時期を明治時代に設定した理由は、先行研究で扱われていない時期であることに加え、岡田虎二郎の下で静坐を開始する前にあたるからである。

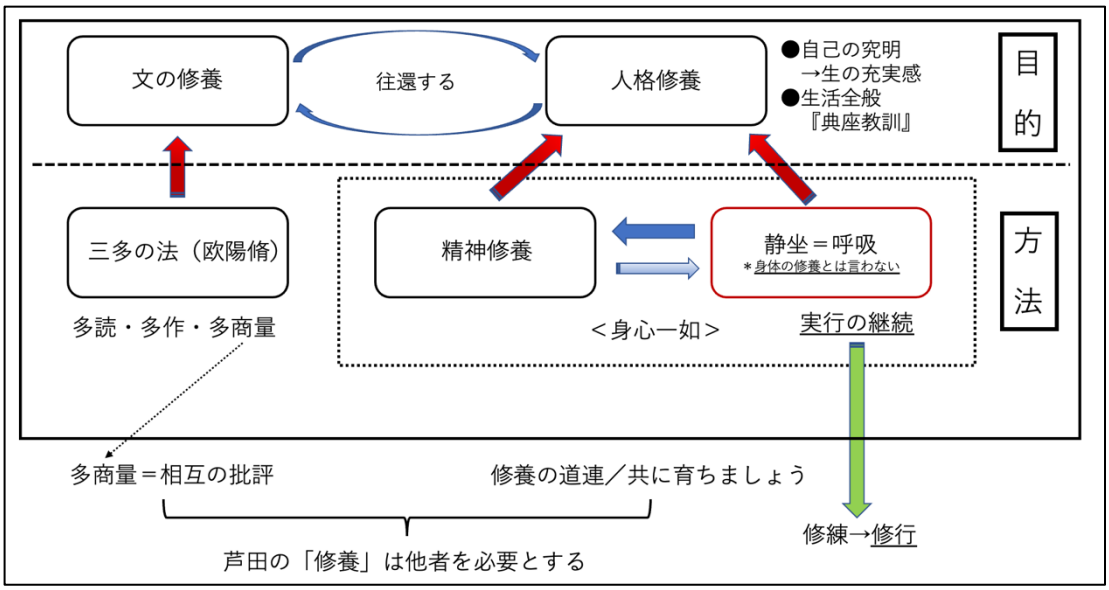
検討の結果、次の 3 点が明らかになった。1 つ目は、「修養」が「修練」の強調語として用いられており、「修養」に特別な意味が付与されていないこと。2 つ目は、「修養」が当時の辞書の意味に近い一般的な言葉として用いられており、教育思想を表現する概念になっていないこと。3 つ目は、「修養」の具体的方法として、欧陽脩の「三多の法」が示されていたことである。特に 3 つ目は、明治期における芦田の修養が「文の修養」だったことを明確に示しており、本論文の成果として特筆すべきものだと言える。

（２）芦田恵之助の「修養」再考

本発表（日本教育方法学会第 58 回大会・自由研究発表、2022 年 10 月 1 日、於山口大学）では、芦田恵之助の「修養」の構造の素描を発表した。『芦田恵之助国語教育全集（全 25 巻）』を検討対象とし、「修養」「修練」「修行」の使用回数調査及び使用例の分析を行った。その結果、以下の 4 点が明らかになった。

1 つ目は、芦田の「修養」は、「自己を究明」し「生の充実感」を得るための言葉だったことである。しかし、芦田は意義（目的）や方法を語るが、「修養」の概念定義はしていないことが確

認された。2 つ目は、明治期は「修練」の強調語として「修養」を用い、昭和期には「修行」で「修養」の内容を語る傾向にあることを確認した。3 つ目は、芦田は「修養」や「修行」といった言葉（や概念）よりも、「行為を継続する」ことに何よりも重きを置いていたことである。4 つ目は、芦田の「修養」の構造を以下の図に整理したことである。



今後の課題として、次の 2 つが残された。1 つ目は岡田虎二郎の修養観を整理することで、岡田が芦田に与えた影響を検証することである。岡田は修養の定義をしていない。とはいえ、芦田の修養観に人格修養が加わり、静坐という具体的な方法を獲得したのは、岡田との出会いなくして語ることができない。そのため、岡田からの影響は、修養観というよりもむしろ、「修養の道連れ」から「共に育ちましょう」へ展開する修養の場づくりと関係性にあると考えられることを明らかにする必要がある。2 つ目は、昭和期から使い始める「修行」の検討である。芦田は、岡田のもとで静坐を始めるのと同時に、嶽尾来尚師のもとで禅の話しを聞き続けている。また、ほとんど本を読まない芦田が、戦中期から『本證妙修』『典座教訓』を耽読し、友人から勧められた『歎異抄』も読んでいる。そのため、曹洞禅の思想から芦田の「修行」を照射することが課題となる。また、芦田は「修行」の使用と同時に「行ずる」という表現も使い始める。戦中期には「行の教育」（橋田邦彦）もあるため、「行」あるいは「修行」から同時代の文脈で芦田の「修行」を検討する必要もある。

なお、本発表はまだ論文化できていない。早急に論文化して学会誌に投稿することも、課題として残されている。

（3）戦後の芦田恵之助の教育思想

本論文では、芦田の戦後教育思想の標語である「共に育ちましょう」を、大正期の「修養の道連」と昭和戦前期の「師弟共流」「同志同行」を手がかりとして明らかにした。

「修養の道連」は、『綴り方教授』で述べられた教師と子どもの人格及び文章に対する態度の関係が、教師の自己形成を主とする「修養」に吸収されるとともに、他者を必要とする「修養」の在り方であった。「師弟共流」は、朝鮮総督府編修官と南洋庁読本編纂嘱託の経験を背景に、「修養の道連」が変化した表現である。教師の「修養」だけでなく、子どもの育ちにも焦点が当てられ、教師と子どもはお互いの存在があって育ち合っていくことを強調している。また、1930 年代以降、芦田と全国の教師の関係を示す言葉として「同志同行」が雑誌名として使われ始めた。芦田は心身二元論に対して批判的な立場を取り、身体も心も安らかになるためには身心を一元的に考える必要があることを主張し、『典座教訓』を参考に生活のすべてを「修行」と捉えた。その結果、坐ることで身心を調え何事も夢中に取り組めば苦行ではないという「易行」に行きついた。それが「行ずる」ことであり、「易行道」として表現された。

戦後の「共に育ちましょう」は、戦後民主主義に応じて「修養の道連」「師弟共流」「同志同行」がまとめられたものであり、敗戦後の葛藤の中で自らの教育思想の集大成として結実したことが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 齋藤智哉	４．巻 57号
２．論文標題 戦後の芦田恵之助の教育思想に関する覚書：「修養の道連」「師弟共流」から「共に育ちましょう」へ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 國學院大學教育学研究室紀要	６．最初と最後の頁 1,12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤　智哉	４．巻 56号
２．論文標題 明治時代における芦田恵之助の「修養」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 國學院大學教育学研究室紀要	６．最初と最後の頁 25,36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤　智哉	４．巻 第124巻第12号
２．論文標題 〔談話室〕「研修」は「研究」と「修養」を合わせた言葉なのか	５．発行年 2023年
３．雑誌名 國學院雑誌	６．最初と最後の頁 40,41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 齋藤智哉
２．発表標題 芦田惠之助の「修養」再考
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Masamichi Ueno, Yasunori Kashiwagi, Kayo Fujii, Tomoya Saito, Taku Murayama	４．発行年 2020年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 162
３．書名 Manabi and Japanese Schooling: Beyond Learning in the Era of Globalisation	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関